

## 救急病棟入院患者における異常行動の現状

救命救急センター病棟 太田亜希子 松村 葉子  
救急部 安心院康彦

### I. はじめに

当院救急病棟には月平均約 200 例の患者が短期間入院し、うち認知症、せん妄、急性意識障害などにより異常行動を示す例が少なくない。我々は、その現状を把握するため過去 6 ヶ月において当救急病棟に入院又は入室し、そのうち異常行動を呈したと判断された患者についての実態を調べたので、その結果を報告する。

### II. 対象と方法

対象は平成 18 年 3 月から 8 月に救急病棟に入院又は入室した 1,153 名である。

方法は調査資料として、当病棟で使用されている退室サマリーと退院サマリーを用いた。異常行動の示す割合を、年齢別・ADL 別・科別に調べた。

### III. 結 果

入院患者数は 50 歳代から増えはじめ、70 歳代がピークとなっている。異常行動の割合は 70 歳代以上で高くなっており、高齢になるに従い急激に高くなっていった。科別総数は内科、神経内科が特に多く、

割合では内科、整形外科、神経内科と続いた。ADL 別では、0 群では異常行動はほとんどなく、介助がより必要になる 3・4・5 群で高く示された。

### IV. 考 察

環境に適応しにくいといわれる高齢者にとって、入院は大きな生活環境の変化であり、さらに救急病棟、ICU といった特殊な環境のなかで管類に束縛されている急性期患者は、認知症やせん妄により異常行動を生じやすい状況にあると考えられ、今回の調査によりそのことを支持する結果が得られた。これらの結果をもとに看護サマリーの異常行動に関する部分の改訂を進めていった。看護業務に支障を来たす行為を例に挙げ、これらの行動の要因として急性期意識障害、認知症の有無、精神科疾患の有無、せん妄が考えられ、これらを簡単に評価できるようにした。

### V. 結 語

静岡赤十字病院救急病棟では、70 歳以上と ADL 3 以上の患者で異常行動を生じる割合が急に高くなるため、事故発生に特に注意が必要と考えられた。

## DPC 導入後の経過報告と今後の対策

第二医事課 佐藤 光俊 菱井 大輔  
企画課 原川 浩

### I. はじめに

18 年 4 月 1 日保険点数の改定により、全体で 3.16 % の減少点数になり、又当病院は、7 月より DPC 包括請求が始まり病院にとってどのような影響を受けたか検証してみた。

### II. DPC 包括請求に含まれないもの

基本的事項として手術・麻酔・1,000 点以上の処置・放射線治療・リハビリテーション・精神科専門療法・指導管理料・検査の一部（穿刺・内視鏡検査等）等が、出来高請求となる。